

研究計画書

東病棟

研究者：有澤 奈津世

メンバー：広田 真之 石坂 誠 大西 真 嶽 陽子

研究テーマ：

統合失調症患者のストレングス・マッピングシートを用いた支援

研究の動機：

精神科看護においては、急性期から慢性期に至るまで、看護師は患者の症状の軽減や社会復帰支援に尽力しているが、依然として症状中心のアプローチが主流であり、患者の「その人らしさ」や強みに焦点をあてた支援は限定的である。特に統合失調症のような慢性疾患では、完治を前提とした「問題解決モデル」だけでは支援が行き詰まり、患者の持つ可能性や希望に光を当てる機会が少なくなりがちである。統合失調症患者の多くは、繰り返す入院歴や対人関係の破綻経験から、自己効力感が著しく低下していることが報告されている。また、他者に対する警戒心や不信感を抱え、支援者との関係性構築に困難を示すことも多い。その結果、患者自身の希望や目標を語る機会を持たないまま、支援が画一的かつ管理的になってしまう傾向がある。そのような現状において、ストレングスモデルは従来の問題志向型アプローチに代わり、患者の強みや価値を土台に支援関係を築く革新的な方法論である。ストレングスモデルに基づく「ストレングス・マッピングシート」は、患者自身が自分の強みや関心を視覚的に整理し、主体的にリカバリーを志向する契機を得る実践ツールとして注目されている。また、ラップらが提唱するようにリカバリーとは「自分は何者か、どのような人物になりたいのかという感覚を取り戻す過程」であり、看護師はそのプロセスを対話的に支援する役割を担っている。本研究では、ストレングス・マッピングシートを用いた看護実践が、患者のリカバリー志向性や自己効力感にいかなる影響を与えるのかを質的に検討する。

特に今回の対象者は、自己効力感の著しい低下がみられる統合失調症患者であり、従来の介入ではモチベーションの向上が困難であった背景がある。よって、ストレングスモデルに基づくアプローチがリカバリー志向の支援として有効であるのかを明らかにすることは、今後の精神科看護における実践モデルの再構築につながる意義深い研究である。

用語の定義：

自己効力感

バンデューラ (Bandura, 1977) によって提唱された概念であり、個人が特定の状況下で適切に行動し、望ましい結果を達成できるという自信や信念のことを指す。精神疾患を抱える人々においては、治療や社会生活における自己効力感の高低がリカバリー過程に大きく影響するとされている。

ストレングス・マッピングシート

ストレングスモデルに基づき、個人の強み、関心、人的資源、希望などを視覚的に整理するための実践ツールである。患者と支援者が対話を通じて共同で記入し、リカバリー志向のゴール設定に活用される。

リカバリー

精神疾患を抱えながらも、満足いく、自分らしい、希望に満ちた人生を送ることを意味する概念である。医療的回復とは異なり、本人の主観的体験を重視する「パーソナル・リカバリー」が重要視されている。

研究の目的：統合失調症患者に対し、ストレングス・マッピングシートを活用した支援を行い、その支援が患者のリカバリー志向性および自己効力感に与える影響を明らかにすることである。特に、INSPIRE-Jを用いた量的評価および半構造的面接による質的データを組み合わせることで、ストレングスモデルの臨床的意義を多面的に検証することを目的とする。

研究方法：

1. 研究デザイン：質的事例研究 (Qualitative Case Study) として実施する。対象者との継続的な関わりと対話を通じて、ストレングスモデルに基づく看護実践がリカバリー過程にどのように影響するかを探究する。

2. 対象および期間・場所

1) 参加者：当病棟入院中の統合失調症患者 1 名で、自己効力感の低下が顕著にみられ、かつ面接参加への同

意が得られた者

2) 期間: 2025 年 8 月～10 月

3) 場所: A 病棟

3. 介入方法及びデータ収集方法

面接: 研究者が 2 週間に 1 回、計 6 回 (各回 30～60 分) の半構造的面接を個別に実施する。面接ではストレングス・マッピングシートを活用し、本人の強み、関心、価値観に基づいたゴール設定と支援的対話を行う。

量的評価: 各面接の前後に、INSPIRE-J を用いて患者のリカバリー志向性を評価する。

記録・逐語録化: 全ての面接内容は IC レコーダーで録音し、逐語録を作成する。本人の発言は全てデータ化し、質的分析に使用する。

4. データ分析方法:

量的データ: INSPIRE-J のスコア変化を記述統計的に比較し、支援の効果を確認する。

質的データ: 面接逐語録は質的帰納的分析によりコーディング・カテゴリー化を行い、リカバリーに至るプロセスを抽出する。質的分析には、看護学研究に精通した第三者研究者のスーパービジョンを受けながら信頼性を確保する。

倫理的配慮:

本研究は、対象者の人権とプライバシーの保護を最優先とし、以下の点を遵守する。

① 研究目的と内容、研究参加の任意性および撤回の自由、研究参加に伴う不利益が一切ないこと、成果の学会発表予定等を、対象者に口頭および文書で十分に説明し、文書によるインフォームド・コンセントを得る。

② 取得した情報は匿名化し、研究以外の目的には一切使用せず、厳重に保管・管理する。

③ 本研究は、国立病院機構北陸病院倫理審査委員会の承認を得たうえで実施する。

利益相反:

本研究に関連し、研究者が経済的または人的に利益相反のある企業・団体等との関係は一切なく、開示すべき事項は存在しない。

タイムスケジュール:

2025 年 5～7 月: 研究計画書作成

2025 年 8～10 月: 半構造的面接調査実施

2025 年 11 月～12 月: データ分析、論文作成

2026 年 1 月: スライド作成

2026 年 2 月: 発表

文献リスト

1) 萱間真美 (2016). ストレングスモデル実践活用術. 医学書院. p. 12-15, p. 58

2) 渡邊裕美・松嶋秀明 (2020). 統合失調症患者における自己効力感の変容プロセスに関する研究. 精神看護学研究, 23(1), 16-19.

3) 萱間真美 (2024). 対話でリカバリーを支えるストレングスモデル実践活用術. 医学書院. p. 25, p. 91-94

4) 東京大学 精神看護学教室 (2024). INSPIRE-J. <https://mhpn.m.u-tokyo.ac.jp/rs/inspire>

予測される研究の限界: 対象となる看護師の人数が少ない場合、得られた結果を一般化するには限界があると考えられる。